

林業振興に寄与する木質資源由来精油の現状と課題

福島大学食農学類
藤野正也・酒井美緒

【はじめに】

我が国の林業は木材価格の低迷により採算が合わない現状がある。そのため、広葉樹の活用や森林浴、精油（エッセンシャルオイル）といった新たな森林資源の活用方法に期待が寄せられている。本研究では、樹木の樹脂や枝葉などを原料とする木質資源由来精油に着目し、その需要を把握することを目的とした。

【調査方法】

本研究では、現状を把握するために生産者への聞き取り調査（株式会社一十八日）と一般消費者を対象とした Web アンケート調査（2025 年 12 月実施、全国の成人 500 名が回答）を実施した。

【結果】

1. 生産現場の現状と課題

聞き取り調査の結果、社の主力であるクロモジ精油の原料は自生種に依存しており、安定的な確保が大きな課題となっていた。この現状を打破するため、原料の植樹や栽培促進に取り組むとともに、地元高校との連携や体験型講座の開催を通じて、地域経済の振興や関係人口の創出を目指していた。

2. 消費者ニーズの分析

アンケートの結果、アロマ製品の購入時に重視される項目は「香りの種類（67.2%）」が最も多く、次いで「価格（51.6%）」、「リラックスや消臭などの効果（35.2%）」となった（回答率）。「原材料の生産方法」は 5.2%に過ぎなかった。購入したことのある香りの系統としては、「フローラル（60.8%）」、「シトラス（57.2%）」が多かった。木質資源由来である「ウッディ」は 29.2%と少数であった。

製造工程（原料 5kg から 5ml 弱しか採れない希少性など）を説明したグループ A と、価格のみを提示したグループ B を比較した。その結果、スギ精油（2,150 円/5ml）については、情報を得たグループ A の方が「高い」と感じる割合が有意に少なく、割高感が緩和されたことが確認された。一方、ヒノキ精油（1,600 円/5ml）では情報提供の有無による有意な差は見られなかった。

これらより、単なる価格競争ではなく、教育的な情報提供を組み合わせた高付加価値化が林業振興における木質資源由来精油活用の鍵となると考えられた。